



RIFS通信

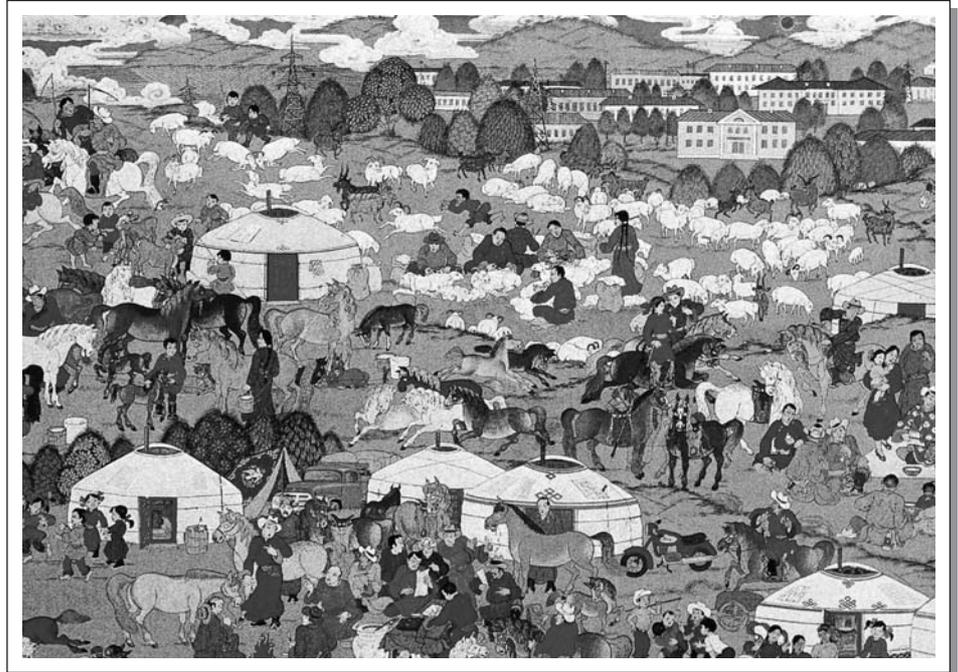
NUMBER
31

平成16年3月1日発行

目次

1. 活動内容
2. 『イベント報告』
「モンゴル民族音楽コンサート」
3. 『現地調査報告』
「モンゴル経済開発の基礎研究」

▼ 牧民の祭風景部分画(モンゴル革命博物館所蔵)



活動内容

研究交流事業

- ・平成15年11月7日
モンゴル民族コンサート「スーホの白い馬」
- ・企業倫理研究会
平成15年6月18日 講演会 講演者 B. M. Jain 「インドにおける企業倫理」
平成16年2月23日 講演会 講演者 堀内 光子 「ILOの企業倫理への取り組み」
- ・日本交渉学会
平成15年5月9日、8月7日、8月28日、10月9日、10月14日
- ・中東報告会
平成15年6月17日、平成15年11月4日
- ・ISA (Inter-school Association)
平成15年4月26日、10月4日、10月25日、11月29日、12月20日、
平成16年1月24日、2月28日
- ・日本語教育セミナー
平成15年5月1日、7月22日、平成16年2月12日

広報・出版事業

- ・国際を考えるシリーズ第22号

チャペルに大草原の風

～モンゴル民族音楽鑑賞会～

国際交流研究所は、2003年度事業の一つとして、国際交流イベント「モンゴル民族音楽鑑賞会」を主催いたしました。2003年11月7日（金）の午後のひととき、川越のプライダルホール内のチャペルで、内モンゴル自治区フフホト歌舞団出身の演奏者による民族楽器の演奏会を催し、80名の聴衆は、大地と家畜とともに生きる牧民の生活から生まれた楽器の音に酔い、大草原を吹く風に想いを馳せました。

演奏会では、民族衣装をまとった奏者による古箏、馬頭琴、横笛などの民族楽器の演奏のほか、婚礼の模擬儀式、民話の朗読、踊りなどが披露され、90分の宴は瞬く間に過ぎました。演奏会の後、楽器演奏をバックに交流宴が催され、モンゴル国からの来賓も加わって、心和む交歓が持たれました。

出演者

司会進行：愛華（国際交流研究所研究員）

馬頭琴演奏：シンアン

古箏演奏：タラ

横笛演奏：チョソーキ

民話「スーホーの白い馬」朗読：海老田志寿子

歌唱・舞踊：チブルハン・チンソエ

交流宴司会進行：田中えり子

草原の風の音を聴いた

堀部 君子

“スーホの白い馬”モンゴルの民族音楽コンサートがあると知ったのは、この夏のことであったろうか。行きつけの喫茶店でポスターを見て、11月7日午後3時と、手帳にマークした。絵本で物語を読んで以来、一度馬頭琴の音色を聴いたみたいと思っていたからである。

川越のホテルの小さなチャペルの一室に、ちょうど納まるくらいの人々が集い、待望の演奏が始まった。

美しいモンゴルの民族衣装を着て、女性はたおやかに、男性はたくましく、モンゴルの若者はすてきだった。

馬頭琴、古箏、横笛、と、交互に演奏が行われたが、そのひびきは形態の似た和楽器のそれとは異なり、草原をわたる乾いた風の音を伝えてくれた。

“スーホの白い馬”の朗読も入り、目を閉じれば、モンゴルの広い草原に座しているような、どこか郷愁をそそられるような響きに包まれたひとときであった。

日本の名曲「荒城の月」が馬頭琴で演奏されたが、入魂の演奏に、国を問わず、古今を問わず、名曲の伝える戦さのあとの空しさを感じた。

演奏者は日本の大学、大学院で学ぶ芸術家たちで、上手に日本語をあやつり、曲の説明を混じえながら、非常に親近感のもてる進行であった。

最後は歌と踊りも加わって、楽しい『祝酒歌』で献杯もあり、最高に盛り上がり、民族の音楽を楽しんだ。

開催時刻を調整してもらって、もっともっと多くの人々に聴いてもらいたい心に響くコンサートであった。

ブライダルホールにモンゴルの音と風

佐藤 弘子

その日は、11月のこの時節にしては、蒸し暑い日であった。川越近くのブライダルホール、その礼拝堂だけには爽やかなモンゴル草原の風が吹いた。国際交流研究所主催の「モンゴル民族コンサート『スーホの白い馬』」に80人余りが集まって、人と自然と家畜との交歓から生まれた民族音楽の演奏を鑑賞した。

クラシックの音楽コンサートのようなかたいプログラムも解説も妙な気負いもないアットホームなコンサート。あるのはその珍しさで目を引く数々の楽器への期待と好奇心。

1日でたくさんの音具たちに出会い、日頃、自分自身が求めている「何か」に出会えたような気がした。それは、ゆっくりと流れる時間と静寂、様々なピッチの混ざった豊かな響きだったように思う。

自己紹介と楽器紹介の後、さっそく珍しい民族音楽の演奏が始まった。

馬頭琴での「スーホの白い馬」、古琴での「羊の毛刈り歌」、日本の曲をアレンジした「荒城の月」「浜辺の歌」、横笛による「遊牧民の歌」などなど。それぞれが音が出た瞬間にその楽器の世界を強烈に主張していた。

シンアンさんが演奏する馬頭琴は、モンゴルの代表的な楽器で、一番上に馬の形がついており、2本の弦を弓で擦って演奏する。細く束になった馬の毛を弦として共鳴させる。たった2本の弦で様々なリズムや音階を繰り出し、その音色は草原の風を感じ、心にしみわたる響きで、あっという間に体の奥底にあるアジアリズムを呼び覚ませた。

横笛は高めのピッチで聞こえて、それでいて耳に優しい音。手の平くらい小さいシンプルな楽器が人を圧倒する表現力を発揮してみせる演奏だった。

聞いてみたかった古琴をいよいよタラさんが弾き始めると、予想をはるかに越える美しい音色に瞬間的に引きつけられた。西洋音楽のハーブに似

ているが、もう少しアジアの楽器のほうが、人間的な感じだ。タラさんの水面を指でなでるような弾き方が、印象的で見た目にも心が癒された。

祝いの席で歌われるモンゴルの伝統的な歌、「祝酒歌」を全楽器の演奏に合わせて歌ってコンサートは幕を閉じた。それぞれが個性的な音なのに、一緒になってもハーモニーを奏でていた。この曲の途中、モンゴルの衣装をまとった女性たちが、酒杯を客席に持ってきて配りながら舞踊をした。モンゴルの結婚式の様子を演出していた（新郎役はTIUの大学院生）。この場所に集まった人達で、ここだけのモンゴル空間を作り上げていった。個性的な楽器の音に包まれて、ここが日本ではないような気持ちになった。モンゴルの草原の大自然を感じ、自分を感じた1日だった。

私はシンアンさんの指導のもと、楽器にトライしてみた。「あれっ、何だろう!!」という不思議な刺激があった。受け止めやすい刺激であり、心地よかった。簡単には音は出ないが、なつかしい実にはいい音がした。モンゴルの楽器は始めて聞くはずなのに、忘れていた音を思い出した気分させる。日本の昔ながらの生活の中にあつた何かがある。日本で失われつつある安らぎや、心地よさの大きなヒントと可能性を感じた。

コンサート終了後、国際交流パーティが行われた。大自然の中で育んできた豊かな響き、その素晴らしさの源であるモンゴルでの生活と文化について演奏者が話してくれた。参加者の方は質問したり、楽器に触れたりして「ステキな音ですね」「不思議な音だね」などと感想を口にしながら、次第に共感が生まれて、楽しい国際交流の夕べとなった。

四年ぶりのモンゴル訪問 モンゴル国との共同研究の回顧と展望

国際交流研究所長 金子 勝

はじめに

モンゴルとの交流は、当初のモンゴル科学アカデミー東洋学研究所との交流から始まりました。この間、専門家の相互訪問を通じての研究交流をはじめ共同研究プロジェクト、調査委託など、多様な友好関係を続けてきました。ソ連邦の解体とともにモンゴル国が自立の道を歩む過程で、国際交流研究所は知的交流を通じてささやかながら支援してまいりました。

交流のパートナーが、科学アカデミーから国立研究所であるモンゴル経済発展センター (Mongolian Development Research Center: MDRC) に移行して以降、特に重点を置いているのは、モンゴル国諸地域の開発戦略に関する調査研究です。我が国とは全く異なる地政学的条件にあるモンゴル国の地域開発は、われわれこの分野の研究者にとっても新たな発想を必要とする課題です。

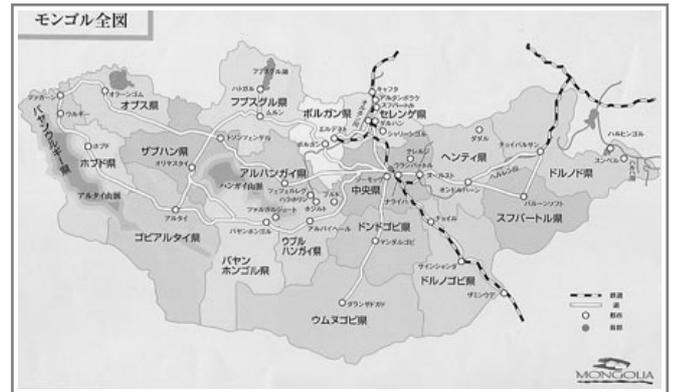
第一に、広大な国土に、乏しい人口が分散居住していること、第二に、交通インフラをはじめとして経済社会基盤施設の整備が著しく立ち遅れていること、第三に、北と南をロシアと中国という大国に挟まれていること、人口の多くを占めている牧民の経済生活には依然として自給自足的な性格が濃厚であること、第四に、未開発の資源、稀少資源を保有し、潜在的な開発可能性があること、最後に、勤勉・実直・純朴な向上心に富んだ人材を有していること、などが開発戦略を考える初期条件だとみられます。

以下では、国際交流研究所のモンゴルとの研究交流を回顧しつつ、モンゴルの地域開発の動向を概観します。

1. 初期の開発軸は南北回廊

経済的自立を考えるにあたっては、まずは、かつての旧ソ連邦との密接な関係のもとで形成された基盤を活用することです。一つは交通基盤であり、もう一つは基幹産業です。前者に関しては、ロシア国境から中国国境を結ぶ鉄道が注目されます。ことに首都ウランバートルとブリヤートを經由してシベリア鉄道と結ぶ輸送基盤が重要視されます。後者に関しては銅、ウラン、金、石炭などの鉱産資源の開発利用、さらに畜産加工産業を挙げられます。

モンゴル科学アカデミー東洋学研究所との初期の共同研究では、南北交通軸を活用した経済開発を優先させることを提唱しました。南北に狭く東西に長い国土の形状からすると、南北中央回廊の経済開発をトリガーとして、逐次、東西軸の



開発を展開していくのが現実的な開発戦略であると提案しました。

2. 東西開発軸の形成

南北軸については、交通幹線軸にそって線状、あるいは面的な一体性を形成していく条件がある程度備わっていますが、東西軸に関しては、長大な距離を線的・面的に一体化していくには巨額のインフラ投資と長い時間を要するものと考えなければなりません。そこで東西開発軸の形成に関しては、東部地域および西部地域に拠点都市を開発・整備し、この拠点と中央回廊とを、まずは航空路によって点的に結び、同時に拠点都市と東部地域内、西部地域内の諸地域とを線的に結合する交通インフラを整備することを提唱してきました。

こうした考え方がモンゴル側に受け入れられ、開発戦略上の地域区分に関しても、上の基本コンセプトに沿って進められています。国際交流研究所とMDRCとの共同研究は、東部地域と西部地域の拠点都市の開発戦略を考える方向で展開されつつあります。

3. チョイバルサンを中心とする東部地域

東部地域の中核都市は、チョイバルサンです。この都市名は、スターリン時代にモンゴルの革命指導者であった英雄の名にちなんでいます。旧ソ連との経済的連関が最も際立っていたのがチョイバルサンを中心とする東部地域でした。また、東部地域は中国東北部と国境を接していて、第二次世界大戦において蒙古に進出しようとした日本軍が悲惨な敗北を体験したノモンハンは、この地域の最東部に位置しています。

ウランバートルから陸路で東部地域を訪問したかったのですが、道路事情が悪いため、それは断念して、空路チョイバルサンを訪問しました。空港およびアクセス道路、町並み、

ホテルの設備等はロシア色が濃厚なのが、この地域の特色です。旧ソ連邦の崩壊とモンゴル国の独立とともに、多くの施設がロシアからモンゴルに移管されていますが、ロシア人の撤退とともに、それら施設は遊休状態のまま放置されているものが多く、中層の鉄筋コンクリートの住宅も廃墟と化していました。ホテルの設備もメンテナンスが十分ではありませんでした。

青森県車力村から、河川敷に稲作および畑作を普及しようと、ボランティアが活動している現場を訪問しました。小規模ながら収穫を得るところまで実験農場が成功していました。

この東部地域で産出される戦略物資のウランおよび金は、鉄道を利用してロシアに運ばれているということでした。交通条件からして、ウランバートルよりもロシアとの経済関係が依然として強い地域です。

印象的であったのは、病院を訪問した際に、ロシア人医師が、医薬品の不足のために十分な医療サービスが施せないこと、市場経済化とともに医療費負担が重くなり、治療を受けられない人口が増えているという問題を訴えていたことでした。かつて社会主義経済の下で人々が享受できていた医療や教育が行き届かなくなっている現実を知らされました。

中心都市とはいえ、チョイバルサンの街は閑散としています。東部諸地域から中心都市への交通条件が未整備なため、東部の諸地域はそれぞれ小規模に分散自立していて、求心的な核都市が成立していないためだと想われます。求心的な交通ネットワーク整備から東部地域の開発に着手する必要があります。

4. ホブトを中心とする西部地域

次に調査に訪れたのは西部地域です。中心都市はホブトです。ホブトは盆地状の地形の中心に位置しており、万年雪をたたえた山岳地帯から流出する豊富な水に恵まれています。水補足のため農業生産性が低いモンゴルにあって、この豊かな水資源は西部地域の開発可能性を高める基礎条件になります。ただし、電力はロシアからの送電に依存しています。ちょうど当地を訪れたときは、山岳地帯を越える送電塔が強風のために倒壊して、電力供給が途絶えていました。ホテルでは時間を限って自家発電設備を稼働させて何とか生活の必要を賄っている状態でした。工場等の生産施設は、自家発電設備を備えていないと操業できません。安定した電力の確保は西部地域の開発にとっては緊急課題です。ディーゼル発電設備の増強で対応しようとしています。それは緊急避難的な措置でしかありえません。

ホブトには、ドイツとの合弁で操業開始しているカシミア工場があります。最新鋭の設備を装備した工場ですが、面会した工場責任者は、西部地域の牧民から集荷できる原料毛が十分に確保できないため、稼働率が低く、採算性が悪いこと

を嘆いていました。カシミア市場は、モンゴルの牧民にとってはたいへん魅力的な市場です。しかし、モンゴルの自然と巧みに共存してきた遊牧は、生育する草と馬、牛、らくだ、羊、ヤギの飼育頭数の組み合わせの妙によって維持されるもの。ヤギの飼育頭数を増やして高い収益を獲得しようとする、畜牧のバランスが壊れ、それは同時に生態系の破壊につながるというのが遊牧に詳しい当地の農業学者の見解です。したがって、カシミアの生産量(輸出量)が増やすことには限界があるといわれています。

カシミアの原料集荷が不安定なのは、輸送のためのインフラが劣悪であることも大きな理由としてあげなければなりません。それは前述の東部地域と同様です。域内交通基盤の整備が緊急の必要となっています。域内交通システムとともに、拠点都市ホブトの空港設備の劣悪さも大きな問題です。設備という概念に相当する施設は皆無で、背の低い草に覆われた自然の大地を均しただけの滑走路があるだけです。天候の影響で欠航も多いようで、拠点都市の空港としてはあまりに貧弱です。西部地域の開発を促進するためには、域内交通施設の整備と並行して、点と点で拠点間を結ぶ空港の整備は緊急不可欠です。

なお、この西部地域の特色に、カザフスタンとの密接な関係が挙げられます。山岳地帯にはカザフ族の山岳牧民も多く居住しています。また、西部地域の南部は、土漠地帯を越えて中国新疆ウイグル自治区と経済的に深い関係にあることです。ホブト訪問期間中に、ウルムチから自転車で土漠を踏破し国境を越えてホブトに到着した日本人青年に会いました。彼はさらに自転車でウランバートルに向かうという冒険旅行中でした。

5. 工業集積のある北部地域

モンゴルとの交流の初期にすでに、北部地域(ウランバートルから鉄道に沿ってロシア国境に至る地域)の開発問題を共同で研究してきましたが、2003年8月には、国際交流研究所から北部地域の開発動向を視察に出向きました。ウランバートルで開催された「FTA」と「貧困問題」の二つのセッションに分かれた国際会議を終えて、北部に向かいました。従来の経験から、午後ウランバートルを車で出ると、最初の目的地であるエルデネット銅鉱山に到着するのは深夜になると予想していました。ウランバートルからロシア国境にかけての南北幹線道路はよく整備されていますが、ダルハンという都市から西に分岐してエルデネットに至る道路は整備状態がよくないため長時間を要するとみていたからです。ところが、中国、ロシア等の協力(これらの国は銅をモンゴルから輸入しています)で、舗装道路が見事に整備されていて、夕食時間までに銅鉱山の都市エルデネットに着くことができました。

銅鉱石はモンゴルの主要な外貨獲得源です。露天掘の鉱山ですが、永年掘削を続けてきたため、現在では地下140メー

トルまで掘鉢状の壁に沿って掘削が進んでいます。また、精鉱後の廃滓には希少金属を始めとする有用金属が含まれていて、商品価値があるとされています。実際に、廃滓から金を抽出するプラントも試験的に運転されています。また、廃滓から電気分解装置を使って銅版を生産する小規模な向上が稼働しています。しかし、多くは精鉱して原料として輸出されています。

エルデネットから再び南北幹線道路に戻り、工業都市ダルハンを訪問しました。ここには独立前から操業している製鋼工場があります。民営化されて3年目になりますが、これまでは毎年赤字決算が続いていました。今回、訪問して、3年目にして半期で黒字決算を計上し、年間でも2003年度は黒字が見込めるといふ嬉しい情報に接することができました。主として国内建設用の棒鋼とH型鋼を生産していますが、対中国輸出が好調なのが黒字の因となっているということです。

問題は二つあって、一つは原料の屑鉄の確保です。主にロシアから輸入しています。原料確保が生産量の限界になりそうです。もう一つは電気炉製鋼ですので電力料金が生産コストに大きな割合を占めます。国営工場時代には優遇価格で電力の供給を受けていましたが、民営化後は市場価格で購入しなければならなくなりました。政府に優遇料金を申請していますが、競争力が問われるようになると、電力コストが制約となります。

前述のチョイバルサンと同じく、モンゴル社会主義革命の英雄の名をとったスフバートルを經由して、南北幹線道路をはずれて、国境の町アルタンブラフを訪れました。ここにはモンゴル初の自由貿易地区地域(Free Trade Area)を開発することが決定しています。国境を越えたロシアブリヤートの都市はキャプタです。国境の検問を通過するトラックのコンボイに出会いました。荷は木材(針葉樹の丸太)です。スフバートルの鉄道貨物駅で鉄道に積み替え、中国へ向かう木材ということでした。

ロシアとの関税交渉は難航しているようです。FTAに対する特惠関税をロシアが認めない限りFTA開発は意味を持たないこととなりますので、関税交渉の結果がFTA開発の速度を決定することになります。また、ブリヤートにはモンゴル族が数多く居住していて、南の中国内モンゴル自治区とともに国境を挟む同一民族の存在が、両大国とモンゴルとの関係に微妙な問題が潜在しており、南北の両大国にとってもモンゴルとの経済関係に意を用いざるをえないと考えられます。

6. 首都ウランバートルの変容

最後に、4年ぶりに訪れたモンゴルの首都ウランバートルの変容ぶりについて記します。街並みが華やかになっていますが、それは圧倒的な数で増えているコスメティックショップとビューティーサロンの登場です。街を歩くと化粧品店と美容院が軒を連ねて華やかさを競っています。また、輸入品

を取り扱う商店が増えています。4年前とは街の姿がすっかり変化しています。

この変容が何を意味するか、拙速に結論づけるのは危険ですが、一つは後発の利益で、都市のサービス経済化が急速に進んでいるのは確かのようにです。市場経済化が進む過程で、国営工場、それも小規模なものづくり企業が衰退していかなかで、旧国営工場の製品に輸入品がとってかわっていること、それが商業企業の成長をもたらしているのでしょう。都市のサービス経済化は雇用構造の面では、女性の職場が急拡大することを意味します。したがって、都市の購買力の拡大はもっぱら女性の購買力なのです。

反面、大都市に職を求めて流入してくる男性の職場はむしろ減少しているといつてよいと想われます。失業、反失業の男性労働力が滞留しています。同時に、周辺の牧民世帯からはみだした児童が街路に数多くたむろしていることはすでに報じられているとおりです。彼等は、土地の人が往来している間は、児童らしい無邪気さではしゃぎ合っていますが、外国人などを見かけると、その表情と態度は急変します。また、所在なげに路上にうずくまる男性の姿も増えました。

そのような街の風情のためでしょうか、「なるべく徒歩で街を歩かないよう」、あるいは、「夜間は街に出ないよう」、注意されました。これも4年前にはなかったことです。市場経済化とともに一定の経済成長が持続すると、貧富の差が拡大するのは避けがたいことなのでしょう。社会主義経済のもとでは貧困の分かち合いという症状がなかったわけではありませんが、市場経済化の過程で下層に追いやられた人々の間では、体制への不満が昂じてくることも避けがたく、これが政治的な不安定要因になりかねません。

ウランバートルの国際会議で「FTA」とともに「貧困問題」が主題になった理由もうなずけます。相対的貧困問題以上に深刻なのは飢餓に代表される絶対的貧困が蔓延することに対しては政府の関与によるセーフティネットを再構築しなければならないでしょう。

7. 今後の共同研究について

やや随想風にこれまでの共同研究の流れを回顧しましたが、今後については、モンゴルとの共同研究をもう一步前進させたいと考えています。これまでの地域開発に関する諸提案をフォローしていくことに加えて、もう一つ残された南部地域、すなわち中国内モンゴル自治区との国境を含む地域の開発戦略に関する研究に取り組みたいと念じています。モンゴル国は広大な国土を擁しているので、全地域を網羅するにはより多くの時間を要するでしょうが、大きな地域単位としては南部地域を訪問して現地事情を把握するとともに、大国中国との経済関係が深い南部地域の将来を展望することができれば、全国的な視野からの「モンゴル地域開発研究」に関しては、ひとつの区切りをつけることができます。